

NO.16 チェック介護保険

措置から選択へ、新しい制度に戸惑いながら試行錯誤の一年だった介護保険制度。それでも紆余曲折を経て、介護保険制度は問題を残しつつも、確実に定着しはじめています。実感は、不十分さはあっても、手をつけられればサービスは提供される仕組みです。問題点を拾ってみました。

◆苦情の対応と窓口整備
ケアワーカーの資質は、会の資質そのものです。この一年、会として幾つか深く反省をしなければならぬことがありました。会の資質を率直に受けるためにも、会は苦情を率直に受け止め、迅速に対応、思い切った決断を提示し、定例会で公開しました。利用者さんからの苦情受付の用意があることを、契約書でも会報でも提示させていただきます。皆さまは、なかなか苦情が言いにくいようです。苦情を言っていただけ信頼関係を築かなければと

老いと家族と地域を考える 「映画とシンポジウムの集い」に大きな反響 参加者は690名

「小さな共同生活の場を」グループホームに高い関心
「高齢社会我が街を語る」シンポジウムには谷一宮市長も飛び入り参加

“感動” 映画“ホーム・スイートホーム”のワンシーンから
— 痴呆症の父をもち、自身が車椅子生活になった息子が語る —
「初めて人の気持ちが変わった
下から見上げる世界は
上から見下ろす世界とは
全く違っていった」

去る、三月十八日(日)愛知県一宮勤労福祉会館大ホールにて、高齢社会が抱える問題をテーマにした「映画ホーム・スイートホームの上映会」とシンポジウムの集い」を当会主催で開催しました。会場は老若男女で超満員、六〇四の座席では足りず、やむなく通路に座っていたり、後ろに立っていただいたり、という盛況さでした。

◆安心への模索
このような反響をいただけたのは、多くの方々が様々な立場から、これからの老いと病と孤独にどう向き合っていくのか、不安と迷いを持たれており、安心への選

◆映画のあらすじ
痴呆症の父をもち、自身が車椅子生活になった息子が語る。元歌手は痴呆症でも力強い歌声を放つ。元歌手は痴呆症でも力強い歌声を放つ。元歌手は痴呆症でも力強い歌声を放つ。

択肢を模索されているからだと思います。そして、高齢社会の新たな方策のひとつとされるグループホーム(小さな老人ホーム)にも強い関心を寄せて下さったのだと思います。

◆高齢社会を我がことに
参加の皆様には、この映画から、グループホームへの理解と、老いや痴呆、家族の在り方、人と人のふれあいなど多くの問題を改めて考える機会にしてください。お寄せいただいたアンケートからも、それを強く感じられました。

◆アンケイトから
痴呆になっても、「自分らしい居場所」があるかどうか問題。映画では、グループホームこそが「彼の居場所」だった。

◆一番関心のあるテーマ
住み慣れたところで自分らしく暮らしたい。

◆真の福祉とは何かを訴えた素晴らしい映画。
やはり大切なことは「人の心」であると痛感。

◆とても感動しました。
ゆくゆくは我が家を利用してもらいたい。グループホームが出来たらいいなあと考えています。

◆これからは、地域の中で認め合い、助け合い、支え合う社会だと思いたい。

グループホームの説明は裏面

◆置かれている条件が配慮されない介護保険
本人の心身の条件だけで、サービス内容が決まるため、病弱な一人暮らし、高齢者夫婦などには、使いつらい問題が生じます。

◆老々介護を余儀なくされているご夫婦には、夫婦二人に支援が必要。認定から外れて自立になると、サービスは一人しか受けられない。「洗濯物も一人分が原則」というケアマネジャーの説明に、ご夫婦はかえって面倒だと、介護保険の利用をやめられてしまった。

◆緊急時の対応が
体調が急変したら、介護度の変更が認められなくても、身体の変化に合わせ、当然サービス内容は変化します。にもかかわらず、保険上では限度額いっぱい、ケア内容は机上では依然として変わらぬままが実情です。利用者負担や限度額を考えると、事業者は黙って居る事が殆どです。今の介護

◆どんなケアも拒否はしない
ケアについては、困難なケアでも、緊急であっても、効率が悪くても対応してきた一年でした。

◆ケアマネジャーを持たない当事業所は、すべて他からの依頼を受けます。どういう事情で当会にケア依頼がきたのかからしないが、当会を必要とされる方にはすべて、即対応してきました。いつでも、どこでも、だれにでも、これが当会のモットーです。施設ケアで、重度の痴呆症の方をお断りになられたケースを聞くことがあります。重度こそお願いしたいと思

◆まず一步を皆で
また、映画終了後のシンポジウムにも大勢の参加があり、およそ五〇〇人の方が残って下さり、関心の高さを思わせました。さらに、谷一宮市長の突然のシンポジウム参加は、会場の皆さんにとって、市長から直接お話しを伺うまたとない機会となりました。

◆地域で支える福祉
他の市町で活動されている宅老所やグループホームからの現状報告や課題を聞き、映画とオーバードラップさせながらのシンポジウムは説得力がありました。愛知県社会福祉協議会丹羽次長は、地域の中で支える福祉を強調されました。

◆市民参加の社会を
参加者のアンケイトによれば「これまで、こういう話しが聞ける機会がなかったから」ともいい刺激になった。「我が街にもグループホームがほしい、その為に、自分も何かをしなれば」と、受け止められた方もありました。また、「意義あるシンポジウムだったし、福祉の世界に希望がもてた」「悲惨な介護ではなく、健やかに、皆が過ごせる介護を目指さなくてはならないと感じた。私もそのひとりになりたい」など、みんなで作る社会へ、参加する一步が必要だと考えておられる市民が増えてきているとも感じられました。

◆今回、こうした啓蒙啓発活動の大切さを一層感じられたこと、ご支援いただきました皆様に心から感謝申し上げます。